〔書評〕

日常生活における「ケガレ」に直面して
——書評『道在屎溺：当代中国的廁所革命』(周星著)

Facing the Impurity in Everyday Life:
Book Review of *Tao is even in the Shit and Urine: Toilet Revolution in Contemporary China* (Written by Zhou Xing)

徐　　贛 麗[1)]

XU Ganli

華東師範大学民俗学研究所

Institute of Folklore, School of Social Development, East China Normal University

E-mail: xuganli@163.com

黄　　潔(訳)[2)]

Japanese translation by HUANG Jie

愛知大学 ICCS

International Center for Chinese Studies (ICCS), Aichi University

E-mail: huangjie201504@gmail.com

Abstract

Based on the summarization and comments on Professor Zhou Xing's latest academic book named *Tao is even in the Shit and Urine: Toilet Revolution in Contemporary China*, this paper points out the

1）華東師範大学社会発展学院民俗学研究所教授、所長。

2）愛知大学 ICCS 常勤研究員。ネイティヴな日本語の修正は、華東師範大学社会発展学院民俗学研究所専任講師中村貴の指導をいただいた。

theoretical and practical contributions of this book in China's academic circle, especially in the academic field of Anthropology and Folklore Studies. And, it tries to have a dialogue with the book by talking about the author's academic style. Specifically speaking, focusing on the theme of "toilet revolution", which constitutes an indispensable part of the contemporary Chinese life revolution, this paper puts forward the deviation and deficiency of the existing academic research on toilet culture and toilet civilization in China, which are easy to be ignored by people, and points out that more attention must be paid to public social problem such as toilet problems.

周星教授の新著『道在屎溺――当代中国的廁所革命』（商務印書館、2019）は、『荘子』の言葉（道在屎溺）を引用してタイトルとしており[3)]、微細な難題について考察を行った、高い学術性と現実的意義を兼ね備える学術作品である。この著書は、トイレ革命という多次元、重要で深遠な意義と現代性を持つ人類学と民俗学の共通の研究テーマを提起している。では、著者はなぜこのような人々に無視されやすい日常生活の現象に着目したのか？また、本書の内容に関して、著者はこれほど複雑な難題をどのようにとらえてきたのか？そこから著者のどのような学問的スタイルを見出せるか？本稿の目的は、これらの問いに取り組み、この著書に対する学術的な評価を行うことである。

1．ネイティヴの人類学・民俗学の視点からみた日常生活の重要な課題

「トイレ革命」というテーマは解決困難な問題であり、一見してあまり重要ではないようなものに見え、普段あまり口にしないような恥ずかしい話題でもある。ただし、トイレ革命はまた、現代中国社会の実情に基づく重要な課題であり、特に現今の感染症流行という背景において、生活に密接に関連する社会的文脈においても現実的な意義をもつ課題である。またトイレ革命は、すべての国民がいかに清潔で、快適で衛生的なトイレ環境を享受でき、またその生活の質や健康水準を向上させることができるのか、という問題と深く関わる課題である。その重要性はいくら強調してもしすぎることはない。西洋世界においても、しばしば発展途上国の公衆衛生に関する問題に対する関心が高まっている。その中でトイレの問題は比較的頻繁に話題として言及されているが、学術的な研究以外にも、やはり根強い差別や偏見をもつ一般的な議論がより多く見られる。したがって、中国の人類学者と民俗学者はこの分野に着目し再検討すべきであると思われる。トイレ革命に着目することによって、中国社会における普遍性と緊急性のある問題に直面し、学術研究を通じて関連する問題を解決する必要がある。

3）「（道）在屎溺」（〔道は〕屎溺に在り。屎溺は糞尿の意）とは、『荘子』外篇・知北遊篇にある言葉で、宇宙の根本原理である「道」が、万物にあまねく存在することの譬えとしてみえる。訳者注

生活革命の提唱により、現代中国では都市から農村にかけて、国を挙げてトイレ革命が行われ、メディアや政府当局もこの問題に対して注目している。著者が言うように、トイレという中国ではなかなか人前に出ない語彙や問題は、国民の日常生活の中の「死角」として長い間遮られてきたが、今や堂々と公共メディアの話題となり、国家指導者たちが特に注目する民生問題となり、さらに一般の人々のあいだで常に議論され、互いに改善に努める生活目標の一つとなっているのである。こうしたトイレに関する研究を行う価値、およびそれが一般の人々の幸福感に与える意義は、これまで一般の公衆が認識していることがないものである（p. 205）。このような社会にとって重要である問題は、従来の人類学・民俗学的研究において、無意識にあるいは意図的に無視されてきた。このような背景から、周星教授の本書刊行の意義は、時宜を得たもので、このような現実的問題に対する認識と関連する政策の実施に備わる社会的・文化的意義について、学術的立場から解釈したことにある。

学術的観点から言えば、トイレとそれに関する話題は、公衆衛生・文明化・生活文化や健康などの議題を含め、我々の社会と文化のすべての面に関連付けられている。しかしながら、中国の学術界はこれらの問題について、これまで十分には重視しておらず、常にそれを一種の「衛生」または「公共道徳」などの問題として扱ってきた。トイレに対する色眼鏡を外し、「非常に複雑で総合的な背景をもつ、現代中国の社会と文化的な課題としてそれを深く理解する」（p. 7）うえで研究したことが本書の独創性を示している。

中国の知識人たちが慣れっこになっている「清高」（高尚さ）のために、下層の一般民衆が使うトイレの環境や用便行為に対し軽蔑を示すこと以外に、この問題についての学術的な意見を述べるのはなかなか難しく、またその意見自体も少ない。国家が管理する公共衛生（政策）という面においても、一般の人々が追求する幸せな生活という面においても、この研究課題は、現在の日常生活に関心が向いている人類学・民俗学の特徴を十分に表しており、一般の人々に寄り添い、社会に資するという目標に向かって努力する学術的価値をも創出している。もちろんそこから現代民俗学の構築や、日常生活の当たり前の論理を追求する著者の学科意識をも表している。

本書は「ネイティヴの人類学と民俗研究」という研究分野の重要な一環として、当該分野において、長きにわたり「他者」により述べられてきた状況にあったトイレに関する研究を、我々自分自身が述べることができるようになり、それによって、従来「他人が言っていること」から、この問題を「自ら語ること」により、ネイティヴの人類学と中国の民俗研究の主体性と尊厳を主張することができるといえる。

２．現代的課題としてのトイレ――文明、生活革命と公共性

「現代中国におけるトイレ革命が及ぼす範囲や深度・困難の度合い・大きさは、これまで行われてきた類似の試みとは、比べ物にならない」（p. 135）とあるように、トイレ革命は、一般的な社会運動とは比べ物にならないほど重要なものであり、またそれは同時に本書に対する筆者自身の評価でもある。トイレという一見ありふれた、誰もがよく知る話題であるが、どう書けば読者がそれを広い視野で、興味深く、深みのある内容だと思ってくれるのかは、それほど容易なことではない。関連する先行研究は、技術的視点あるいは歴史学的視点から考察しており、特定地域の経験に基づいた紹介や、広範囲で収集した資料をまとめた論文集などもあった。しかし、それらの成果の多くはあまり深く研究を行わず、議論が未だ徹底されていないように感じられる。そのため、関連報道や概論などは多いが、厳格な人文社会学的研究分野の学術書は皆無と言える。本書はこの難問を把握することに成功しただけでなく、他の類似テーマに関する研究を超えた価値をもち、現在見られている誰にも取って代わることのできない権威ある成果である。

本書の研究対象はトイレ革命であるが、それだけに止まらない。著者の見解によると、トイレは非常に複雑な社会的問題や歴史的・文化的問題を示しているため、より大きな社会プロセスと文化システムを関連させて、トイレ革命を考慮すべきである。そのため、著者は、トイレの問題を管理や技術など様々な観点から検討してきた社会学・建築家・歴史家など他分野の研究者と異なる立場と視座に立っており、その問題意識と研究の筋道も異なるだけでなく、さらに研究に用いられる資料とその整理方法も当然ながら異なっている。筆者は、このような差異や独自の特徴が本書の魅力であると思っている。

本書は、通時的文脈と共時的で多元的な記述を通して、包括的にトイレ革命という問題の様々な側面について考察している。具体的には、著者はトイレ革命について、時間・空間・社会という三次元から、内部と外部、ローカルな表現と外部の観点との相互作用から捉えている。また著者は、文化人類学と民俗学の立場から、中国におけるトイレ革命をめぐる徹底的な調査を行い、深く理解・探究している。中国は近代以来、トイレに関する問題について様々な議論や改革措置を行ってきた。特に新生活運動、愛国衛生運動、トイレ革命の公共分野などが挙げられる。

本書は、一方では、歴史的な次元から、農耕社会から現代社会までの中国の発展過程において、排泄物の利用や公衆衛生の発展、そして現代生活における質の向上に伴う、一般人の排泄行為の規範および公衆トイレの発展とその変容を整理・考察し、公衆トイレをシンボルとした現代社会の発展プロセスおよびトイレ革命の現代的意義を示している。他方では、中国人の穢れ観念とその変容を示し、その中に含まれている文明や公共性（パブリシティ）などの問題をも示している。本書は、豊富な実例と視野の広さにおいて際立って

いる。具体的には、都市と農村の住民のためのプライベートなトイレ、および公衆トイレの問題（建設や使用および管理など）が含まれており、同時に、国家や地域のイメージを代表する公衆トイレや観光トイレなどの紹介や、日本・韓国などの近隣諸国や東アジア諸国におけるトイレ問題や、公衆衛生の現代化のプロセスとの比較研究も行っている。さらに本書は、トイレの問題を文化意識と一般の人々が追求する生活の質の向上に関連して論じている。

本書を読むと、著者が主に「文明化」「生活革命」「公共性」という 3 つの側面からトイレ革命について論じることによって、他分野や専門家におけるトイレに関する研究の視点や問題意識と差別化を図っていることがわかる。

３．トイレ革命と文明化のプロセス

トイレ革命について議論する際には、「文明化」という人間社会にとって非常に重要な話題は避けて通れない。人々はどのようにトイレを使っているのか、という問題の答えは人間の文明を測定する重要な基準となる。つまり、物質的な文明と精神的な文明がより高い段階にまで発展してこそ、人々は自然に自分の本能と感情を抑制し、日常生活のこの「些細な問題」に文明的な行動と尊厳を覚える。それはトイレの文明化と呼ぶことができる。トイレ革命という話題は、個人の文明的行動だけでなく、集団の生活習慣にも深く関与している。すなわち、プライベートなトイレ環境の向上と個人の品位の顕在化や、公衆トイレの建造や管理、使用なども含まれているため、トイレを「文明化」の話題に関連して提起するのは非常に適切であると思われる。著者は、人々が尊厳を持ってトイレに行ける社会こそが、本当の文明社会だと考えている[4)]。これについては、筆者も同感である。

エリアス（Norbert Elias）は『文明化の過程』の中で、生活様式に着目して文明化の問題を分析した。具体的には、彼はヨーロッパの上層社会における風習の変化から制度の形成の事例を列挙し、感情の抑制から社会構造の変化の実現まで、「文明」の動態的過程を明らかにした[5)]。このように、料理を食べること、トイレに行くこと、手鼻をかんだり、唾を吐くことなど、現在我々が当たり前と思われる行動規範は、実際にはもとからそうであったわけではなく、数百年にわたって変化し、徐々に規範化してきた結果であることがわかる。本書は、主に中国の現象を扱っているが、トイレの問題は他国において、たとえ実際の状況はどう違っても、それぞれトイレの文明化が不断に発展してきた歴史を有す

4）羅広彦：「専訪『道在屎溺』作者周星 能够有尊厳地上廁所的社会才是文明的社会」、『界面文化』、2019年11月30日。https://baijiahao.baidu.com/s?id=1651602029561889402&wfr=spider&for=pc

5）諾貝特・埃利亜斯：『文明的進程—文明的社会起源和心理起源的研究』（王佩莉訳）、「第 1 巻　西方国家世俗上層行為的変化」、生活・読書・新知三聯書店、1998年 2 月、第219–220頁。

る。著者はエリアスの理論を援用して、トイレ文明のグローバル化の過程を詳述し、中国のトイレ文明の推進も同様に、外部の強制と自己抑制が必要であり、そしてそれを継承し積み重ねてこそ、トイレの文明が最終的に一定の水準に達成することができるとする。

本書の第七章では、中国のトイレ革命が経験した歴史過程を順に「発展」「衛生」「文明」という 3 つの段階に分けて詳しく論じている。それは中国人のイメージの変化や国民の体質と文明的素養の向上のプロセスである。文明的に便所を使うことは、かつて「新生活運動」の 1 つの内容であり、蒋介石と国民政府が社会的権力によって私生活に介入した理由は、外国人（主にヨーロッパ諸国の人々を指す）の日常生活の習慣が、現代文明国家の国民の知識と道徳を示すものであり、中国における現代文明化を完了させるためには、中国人の伝統的な生活様式を変え、より文明化された「新しい生活」を推進すべきと考えたからである。

トイレの文明化は、人間の健康（衛生）、医薬（医療）、科学技術の進歩に伴い、様々な疫病に起因する害悪を代価として徐々に進められてきた。近代以降、産業文明は農耕文明に取って代わられ、大都市の発達がトイレ革命を起こした。トイレは類比性があるものであるため、文明の高低を測定する根拠としてしばしば使われ、中国においても、この文脈でトイレ革命を国家の文明プロジェクトとして位置づけられている。現代のトイレ文明は、東アジア諸国や地域において急速に成長し、各国の急速な経済成長およびそれに伴う社会の変遷と密接に関係している（p. 193）。そのうち、日本は、最も早く文明化を推進した東アジア国家であり、20世紀初頭から国家改造に力を入れており、今日の日本のトイレ文明は、最も説得力のある、啓発的・現実的な効果のある文明モデルを提供していると言える。そして、現在、トイレ革命が全国の都市と農村の各地において、全面的に展開されているという成果は、わが国の文明化程度が、すでにより高い段階に上がってきたことを示している。

４．トイレ革命と生活革命

外国人にとって重要なトイレの問題が、中国ではなぜ非常に厳しいマイナスの評価を下されるのか？この問題について、トイレの背後にある社会的・文化的背景から考察すべきであると周星教授は考えている。中国の人々はトイレの問題に対して、「常に漫然としていて、それを問題としないが、日常生活の当たり前の一部であり、また避けることの出来ないものであるとも認めている」（p. 5）。農耕文明の時代には、トイレの穢れ（ケガレ）は農業資源としての価値によって覆い隠されていた。また現代の科学的意識の欠如のため、人々のトイレと衛生の関連性についての認識が未だ不十分である。工業化によって都市化が進行し続けている現代社会において、化学肥料の出現と大都市の人口集中居住など

に伴って、トイレの問題も深刻化してきた。

著者のこれまで出版した他の研究成果と結び付けると、トイレ革命は、実は著者が長年提唱してきた現代中国人の生活革命に関する研究の一部であることがわかる。ここ数十年の間、中国人は急速な経済発展によってもたらされた、生活の向上や改善を経験してきた。特に食料や日用品などの日常的なニーズを満たした後、人々はより繊細な生活を追求し始めた。隣国の日本の刺激を受け、また国家イメージを確立し、日常生活の質を向上させるという目標のもと、商品房（分譲住宅）の購入と内装工事の流行に伴って、トイレという（中国の人々が）常に無視してきた空間は、新たな時代を迎えたのである。言い換えれば、近代化と都市化の過程において、生活革命を背景としたトイレ革命は、中国人が遅かれ早かれ必ず直面し、それを乗り越えなければならないプロセスである。以前、人々は食料や衣料などの生活必需品を重視したため、トイレの問題を人々の生活の外で取るに足らない問題とした。衣料・食料・居住などの基本的なニーズを満たした後、人々は生活の質を重視し、生活の質を向上させるため、潜在的にトイレ文明の需要を刺激することも可能になってきた。トイレ革命に関する考察を通して、周星教授は、人々のプライベートな生活の中で最も隠された部分である、トイレとそれに関する観念の、ここ数十年来の中国国民の生活の変化によってもたらされた影響と変遷について検討した。彼は、物質的な生活様式の変化は表面的なものであり、文明的素養や文明的な観念と生活様式こそが、中国の一般国民が新たな社会段階に入るために不可欠な一環であると考えている。確かに、今日の農民の多くは、すでに都市生活を送っており、現代的な農業生産の中で、化学肥料、農薬は基本的には農場の厩肥に取って代わったため、トイレ問題もこのような発展プロセスの中で、現代的な問題になってきた。そこで、著者は現代社会の大転換という決定的な時期において、トイレ革命の発生と展開の意義が、まさに一般の国民によってより良い社会と、より高品質な生活への追求に合致するものであると認識している（p. 208）。

現在の生活革命は、中国人像に全面的な変化をもたらすものである。伝統的な中国人は、勤勉で、倹約してあまり生活を楽しむ方法を知らない印象があったが、実際には、物質的豊かさが一定のレベルに達すると、中国の人々は生活の質を重視し、衣料の華美と食料の栄養だけでなく、居住環境の改善も求める。外在的な「面子」（外面）の重視から、内在する「里子」（本質）の重視へ、つまり私生活の美化と品質の向上への転向である。私の考えでは、トイレ革命やトイレ文明化の実践が今日注目されている理由は、現代中国において多くの新中流階層などの新たな社会階層が誕生したからである。新中流階層は、繊細な生活と文化の品位を重視し、格調のある、健康的な生活様式を追求しており、日常生活の衛生・快適・美化を追求する代表であるだけでなく、プライベートな生活においてもトイレ環境を改善する主体である。数年前、日本でウォシュレットを「爆買い」した中国人観光客のニュースは、中流階層の人々が生活の質の向上を追求していることを示して

いる。これは、一部の人々の人生における追求が物質レベルの初期段階を超え、個人の尊厳と自身に対する規律に基づき、さらに高い段階に到達したことを示している。また、これは、生活革命が物質的なレベルの全面的な向上を示すだけではなく、精神的・観念的なレベルの進歩をも示しているといえる。

著者は、現代中国人のトイレ革命がもたらす変化について、施設や環境の変化以外にも、糞便や「穢れ」「清潔」に関する観念の大きな変化があり、プライバシーの保護という従来あまり注目されてこなかったもう一つの変化があることに気づいた。トイレやトイレに行く行動は、人々のプライバシーと密接に関連しているため、個人の尊厳が喚起され、プライバシーが尊重され、意義付けられる時代にこそ、トイレ革命やトイレの文明化が重要視されるようになる。なぜなら、排せつ行為にはプライバシーの保護が必要であり、それは人間の心理に深く根ざしたもの（p. 114）であり、トイレ革命の推進力の一つはプライバシーに対する意識の目覚めであると言える。昔は物質的な条件に制限があったため、個人的プライバシーを重視したり、プライバシーを保つことは不可能であった。現在は、家族間や公共空間においても、個人のプライバシーがより重視されるため、トイレの環境に対する要求も高くなっている。私的生活は、干渉を免れ、自省的で隠逸したプライバシーの領域である。そのため、独立した普通の人間として、我々は日常生活の中でこの部分が保証されることを望んでいる。閻雲翔は、私生活の変革と中国社会の個人化現象を通して、中国人の自己と人格は昔とは違って、私的領域の生活と自己存在感を重視するようになっていることを発見した[6)]。ここからすると、個人のプライバシーを尊重し、個人生活の尊厳を守ることは、生活革命における物質生活の基本的な要求から、精神生活の要求へ移行する際の重要な内容であることがわかる。この意味で、トイレ革命はさらに進歩的な意義を持つようになった。著者は、「この革命は、生活革命の他のいかなる側面よりも深刻で困難で紆余曲折を伴うものである。なぜなら、この問題は、すべての中国人に本当の覚醒を求めるためである」と指摘している（p. 232）。それは、トイレ革命が最も深遠な生活革命であることを深く認識し、トイレ革命を通じて生活の質と文化意識の向上を本当に実現できるという著者の考えを示している。この点からいえば、本書の学術的啓発性と中国社会に対する理解の重要な意義は、自明の理である。

現在、トイレ革命はまた、「尊厳ある排出環境に対する良き求め」（P. 232）ということで、特に注目されている。政府が積極的に推進し、民衆も積極的に参加するトイレの建設や公共衛生環境の向上は、特に評価されるべきである。これは国力の向上を反映しているだけではなく、政府の民生に対する重視と国民が良き生活の尊厳と幸福感を求める具体的な実践を反映している。

6）閻雲翔：『中国社会的個体化』（陸洋ほか訳）、上海訳文出版社、2012年1月。

つまり、国民の衣料、食料、住宅、交通などの様々な面での生活革命は、人々の物質的生活の基本的なニーズを満たしているが、トイレ環境の向上はこれに限らない。トイレの問題は、物質的な生活ニーズの基礎だけではなく、健康や衛生などの文明的要素や優雅、快適、尊厳などの品位の要素とも関係し、幸福な理想的生活に必要不可欠なものである。周星教授は、現在行われているトイレ革命が、最終的には中国の民衆の日常生活の中で、最も自覚しにくい観念の深層、つまりトイレをめぐる行為、観念とその環境を全面的に徐々に変えていくだけでなく、一般の人々の生活の質を向上させることができることを指摘している。すなわち、「清潔・快適で、安全・便利で、尊感のある排泄環境という一般の人々のニーズを満たす」（p. 232）ことであり、これは特に注意すべきことである。この点については、政府が積極的に推進し、人々が積極的に参画しているトイレの改造と、公衆衛生環境の整備を肯定すべきである。これは国力の向上を示すだけでなく、人々の生活に対する政府の関心および、人々のより良い生活の尊厳と幸福感を追求するための具体的な実践をも示している。

５．トイレ革命の公共性

都市化と近代化の進展に伴い、人類学・民俗学の農村や少数民族の習俗に対する関心が、次第に公共文化への関心に転じており、中国のトイレ革命はこのような公共性のある問題の一つであるといえる。トイレ革命は都市空間のトイレ建設と使用の公共性に関連し、国家や地方のイメージを表象している。また、トイレ文明は中国という国家や民族の社会建設と文化的品位にも関係している。本書は、主に政府および関係部門が各地でトイレ革命を行っていることについて論じている。政治人類学者を除けば、人類学や民俗学の研究者などは、国や地方政府の行動について説明する者が少ない。しかし中国では、都市部の公衆トイレも農村部のトイレの改造も、常に政府が主導して推進しているのが実情であり、国家や地方政府の存在はトイレ文明のプロセスの主要な動力となっている。そのため、政府の行動から距離を保つのは一種の学問意識ではなく、むしろ学術的自覚から逸脱する傾向であるといえる。

周星教授のこれまでの研究成果と結び付けてみると、彼がなぜ政府の（トイレ革命に対する）推進を重視するのかを理解できる。周星教授が指摘するように、中国民俗学の民俗誌的記述には非常に明らかな傾向がある。具体的に言えば、多くの研究が常に「民俗」というものを清朝末期から中華民国初期、または中華民国期に定着させ、そして通常、郷土・民俗を国家制度の外側にある「桃源郷」として理解してきた。しかし実際には、国家は一貫して民俗の変容に影響を与え、民間文化に対する強い介入を行っている。多くの学者の研究から見れば、国家と民俗との関係は、現代国家の国民文化を構築するための重要

な課題の一つであることがわかる[7)]。しかし、長い間、学術界はこの基本的な問題を無視してきた。周星教授の編著『国家と民俗』には、この新しい課題を明確に提示し、中国民俗学の研究者が国家と民俗の関係および政府の管理と民衆の生活様式、生活文化との関係をより深く研究できれば、この学問が中国において、一般民衆の社会文化生活に対する発言権と説明力を得ることができると指摘した。筆者の考えでは、本書ではこのように政府によるトイレ革命の取り組みを評価することに力を入れているのは、現代のトイレ革命（あるいはトイレ文明）が国家や社会の力を借りない限り、個人による普及はほとんど不可能であり、それに関連する文明的な国民の形成も不可能であることを示そうとしているようにみえる。トイレはプライバシーが存在すると同時に、公共性もある。特にトイレは、公共道徳と公衆衛生においての個人の文明的表現にも関連しており、公衆トイレとその関連施設における社会の供給と維持・管理などの面にも関連している。これに対する政府の態度と統治の水準は、明らかにトイレの文明化のプロセスに著しく影響を及ぼしているため、著者がこうした公共性という核心的問題を捉えたことが、この本の理論性を強化したともいえる。

以上の 3 つの方面は、本書が他のいくつかの関連テーマの学術作品と異なるところであると言える。著名な人類学・民俗学の研究者として、著者の目的は、トイレそのものやトイレ革命の技術問題を議論するのではなく、トイレ革命を検討することによって、中国人の生活観念や行動、および一般の人々の生活の基本的なニーズに関わる公共施設を建造し管理する国家など、様々な側面をも視野に入れて議論している。そのため、本書はトイレに関する問題の「総集編」にしようというわけではなく、著者もトイレ問題の専門家になりたいわけではなく、彼が求めているのは人類学・民俗学研究者が現実と向き合い、堅実な学術研究を行うことによって、いかに社会大衆に貢献するかという問題への回答である。

6．平常の中の非常：学術的品格と表現スタイル

成熟した研究者は、独特の学術的品格と言語表現を有するのが普通である。周星教授の本書における表現も例外ではない。

本書は、ネイティヴの人類学と現代民俗学という 2 つの分野にまたがる学際的な視野を持っている。著者は、『ネイティヴの人類学与民族研究専題』シリーズの総序文で、自分自身の学術的立場について、次のように述べている。「典型的な文化人類学でもなく、人々が抱く一般的な民俗学のイメージにも程遠いかもしれない。」つまり、ネイティヴの

7）周星：「『国家与民俗』導言」、周星編『国家与民俗』、中国社会科学出版社、2011 年 4 月、第 1–15 頁。

人類学と現代民俗学が、相互に補完するような学術的位置づけである。「家郷」民俗とローカル・ノリッジに関する研究は、人類学のローカル化／在地化を実現することができ、人類学の視点や理論と方法を活用することによって、伝統的な民俗研究は現代民俗学へと転回することができる。このような「学科」システムで作られた学問の道から離れると孤立するかもしれないが、二重の視点がかえって革新的な可能性をもたらしている。周星教授の学術研究は、こうした学際的な視点に富んでいる。それは、彼の鋭い学術的洞察力を体現しており、それによって鮮明な学術研究のスタイルを形成している。また、彼の研究は常に中国（本土）のローカルな社会と文化に関する問題に焦点を当てると同時に、広い国際的な学術の背景をも有している。この特徴は彼の一連の研究から観察することができる。

海外在住の長い周星教授は、中国本土の文化現象に関心を持ち、その背後にある論理について詳細に分析し、深く研究・考察してきた。人類学の研究はどのように中国本土に定着していくのか？民俗学は如何にして些細な習慣を収集するという伝統を超えていくのか？これらの問題について、中国ではすでに数多くの議論や検討があったが、多くの研究は依然として伝統的な課題にこだわっているとみられる。また研究対象は、少数民族や辺鄙な田舎（農村）のみに集中しており、一般民衆の現在の日常生活に着目した研究は少ない。このような状況は、学科体系と関連しているかもしれないが、その中にいる研究者たちは学問分野の正統性を維持する必要があるが、周星教授は体制内の学者が学科の中心的位置を占めるために行う、いわゆる専門的な著述の制限を受けることなく、「在野」の観点から、多くの学者が見落としている現象を把握できた。本書のテーマを例としてみると、トイレに関する研究成果のほとんどが、中国のトイレの負のイメージとトイレをめぐる非文明的な行動を批判する傾向にあるが、周星教授はこのようなネガティブな評価に拘泥せず、さらに上からの目線をもつ批判者をも自任せず、中国のトイレ文化が農耕文明の時代に生成したことを指摘する。つまり、あまり注目されない「穢れ観」が一般的に長く存在している理由は、人間や動物の排せつ物が農業生産の「資源」となり、人々にとって悩みの種とはならなかった事と関連し、また他方で、便器などの特殊な象徴的な意味を有するトイレ文化が形成されているとする。このような認識は、エミック（emic）とエティック（etic）という二重の身分を持つことによってはじめて明らかになる。また著者は、現代中国の社会と文化においてしばしば現れる現実的な問題に答えるべく、人類学と民俗研究の学際的な視点とアプローチから、専門的な研究成果を上げてきた。彼自身のこのような学問的志向と一般の人々の日常生活に対する探究は、独特の道を切り開くある種の模範とみなすことができる。

本書は、異文化との比較研究の成果でもある。周星教授は20年以上にわたって日本で教育・研究活動に従事してきたが、自身の学術的特徴として、外国語を通して関連理論や

国外の成果を紹介するという利点を頼りにしていない。近刊の 3 冊の新書[8]および漢服運動・民具・橋・時間制度・「宇宙薬」・習慣法・風水などの学術問題をめぐる彼の著述と論説は、いずれも一般的に設定された学問の限界を超えており、学科を跨いだ相互補完的な特徴を備えている。学問分野の共同体よりも問題意識を重視する現代の学術界において、彼の研究には多くの啓発的意義がある。トイレの問題に対する関心は、彼が長い間中国文化と外国文化との比較をし、その差異の強い刺激のもとで考えてきた文明化の問題に由来する。このような比較の視点は、彼の長期にわたる海外滞在にもとづいた独特の長所である。彼が外国にいても、中国国内の状況に関心を持ち、長期にわたって日中両国の間でフィールド調査と学術交流を行ってきたため、そのような異文化の視点を持つことができたといえる。日本のトイレ文明は世界でよく知られているが、中国はそれとは対照的な状況である。こうした文化の比較がその研究の原動力となり、本書では社会的背景や経済発展のプロセスなどから比較と思考の可能性を提供している。周星教授のトイレ革命の研究は、気まぐれで書かれたものではなく、彼が本書の出版前に発表した数多くの論文や、学術講演と関係するのである。すなわち、本書は彼の長年の研究成果[9]に基づいているものである。

本書は典型的な人類学の作品あるいは民俗学の作品というより、むしろネイティヴの人類学と民俗研究の立場からのトイレ革命の分析を通して、現代中国の生活革命の発展過程と基本的な論理を追究した文化的研究である。フィールド調査の話や西洋の理論の説明に慣れているこの学問分野の研究者は、より多くの現地調査から得られたデータに基づいた報告書を期待しているが、この本は大量の事例を整理した上での論説に基づいている。この点について、一部の民族誌を愛する読者がそれを残念に思うかもしれないが、政府の公文書やメディアの資料を適切に使うことは、中国の人類学や民俗学の研究者にとって、一種の新しいアプローチになる可能性がある。多くの研究者がある地域を拠点としてフィールド調査を行うというミクロな研究の視点と異なって、トイレ革命は全国各地で普遍的に展開され、歴史的な文脈にも深く関係する大きな問題であるため、この問題の範囲の広さや深さ、重要さを示すためには、特定地域の一次資料だけでは不十分である。周星教授は国内外における現地調査資料を収集しながらも、同時に各種の民俗資料とメディア資料を

8）本書および『生熟有度―漢人社会及文化的一項結構主義人類学研究』（北京：商務印書館、2019年）と『百年衣装―中式服装的譜系与漢服運動』（北京：商務印書館、2019年）の三冊である。

9）本書附録に収録された 2 本の論文のほか、例えば、周星「文化自覚与廁所革命」（『文化自信与人類命運共同体暨費孝通学術思想研討会論文集』中国芸術研究院芸術人類学研究所、40–54頁、2017年12月）、周星・周超「『廁所革命』在中国的縁起、現状与言説」（『中原文化研究』2018（1）：22–31頁、周星「百年の不体裁―現代中国のトイレ革命」（『日常と文化』第 5 号：49–61頁、2018年 3 月）、周星「道在屎溺：当代中国的廁所革命」（張士閃・李松編『中国民俗文化発展報告 2017』山東大学出版社、220–269頁、2018年）などがある。

慎重で柔軟に選択し、総合的に運用し学術化している。また、ある都市や農村の一部の資料に止まらず、他の地域に普及している類似状況をも考察している。本書はトイレ革命というテーマについて、地方と国家、歴史と現在など多方面にわたり言及されている。附録に収録される 2 本の論文では、著者のミクロな視点からも問題を把握する能力を示している。

本書は人類学・民俗学の理論と視点から、中国人の穢れ観および公共性の観念、文明論の観念などの発展と変化を探究し、中国文化の深層的な論理を探求した。トイレの問題は、世界の国々や様々な民族が生活の中で経験する一般的な問題であるが、ダグラス（Mary Douglas）の著書『汚穢と禁忌』以外に、海外には中国のトイレ革命を説明するための深い理論がない。実は、私の知る周星教授は、常に学術的思考をする際、西洋の理論に対する援用に慎重であり、研究対象・民俗事象を深く理解することに尽力してきた。一方で、彼は理論を拒否するわけではない。この本では、エリアスの文明化論、ダグラスの汚穢と禁忌論のほかに、費孝通の文化的自覚論、日本人類学、民俗学における文化の両義性論などを参考にしている。しかし、彼はそれらの理論を用いて中国本土の民俗事象を分析する際に、それらの理論を証明することを目的としていない。筆者は長年の教育活動の中で次のようなことを発見した。すなわち、多くの大学院生および一部の若い研究者を含め、しばしば研究において第一に、或いは唯一求めるのは理論であるが、具体的な研究を展開する時、彼らの行動力は不足しているだけでなく、彼らの書いた論文も充実したものにはなっていない。このように理論を追究するための理論的研究は、学術的研究の根本的な目的を忘れてしまうのである。言い換えれば、当人のもつ豊富な知識を示すために西洋の理論を借用して論じること、または単に中国の経験や現象を説明するために西洋の理論を借りて論ずることは問題が多いため、長くは続かないと思われる。

トイレのような敏感な話題について書く時、周星教授の言葉遣いも態度もここで言及すべきである。「下品」なトイレについて、どのように書けば読者はそれを「上品」な作品と思ってくれるのか。その作業は決して簡単ではない。既存の作品からみると、多くの著者はトイレに関する内容を説明する際には、ユーモアや隠喩などの文学的手法を用いて表現しているが、作者はこの難問に直面し、純粋な学術的筆致で書いており、またできるだけ読みやすいように工夫している。多くの関連作品を読むと、それらの著者がトイレの問題を評価する時、トイレに対する文化的な優越感や文化的偏見がしばしばみられる。周星教授は長期間日本に住んでいるため、トイレ革命がすでに完成した日本が、トイレの文明化の道ではるかに先にいることをよく知っており、発展途上国である中国は、まだトイレ革命が完成する前の日本が経験した段階にある。そのため、日本のトイレ文明を参照するのは自然だと思われるが、彼はトイレの問題に関して、自分の国と国民に対して不適当なコメントや意見を持たず、本書の記述は実際な状況に基づいており、著者は冷静で控えめ

で、慎重に考えたことを書いており、優越感も劣等感も感じていない。読者は本書の記述から、著者の研究者としての「他者」に対する尊重、および自分自身の尊厳を諦めずに守っていることが、強く印象に残るはずである。

同時に、本書は外部から強制された文明化の過程を議論する際に、植民地主義に関する評価にも言及している。この点について、本書の記述は著者の客観的な学問の態度を表しており、彼は事実や問題を回避せずに、様々な係争中の敏感な問題や見解に向き合っている。さらに中国のトイレ革命を、全人類のトイレの文明化のプロセスに位置づけ、中国におけるトイレの文明化の拡大と深化を肯定する。そして、著者は「中国のトイレ文化は、それほど自慢にならない伝統的なものから、トイレ革命の洗礼を経て、現代中国の一般の人々を困らせないものとなり、さらに現代中国社会が全面的な近代化を実現するため、または全面的な小康社会を建設し、中華文明の復興を達成するための避けられない道となっている」（p. 148）と合理的に評価している。ここから、トイレの文明化のプロセスに対する細やかな考察を通して、中国社会がこの百年に経験した大きな変化という「壮大な景観」を示す、という著者の狙いを理解することができる。

周星教授の著書や論文から、彼は常に難しい論理を明確に、できるだけ分かりやすく書き、学術用語や理論について難解な言葉を用いない。それは、彼が複雑な資料や情報をきちんと整理・分析・解読して、それを読者に分かりやすくするために努力しながら、同時に学問の思索性と学理性のある言葉で表現する能力をも示している。周星教授の文章は流暢で堅実であり、彼の学術スタイルは低調でありながら質朴であり、内向的でありながら慎重であり、記述に誇張や誇示はまったくない。従って、彼が刊行した論文や著書は、いずれも勤勉な努力による学術作品である。いささかの虚飾もなく、実践の真実を求める文章からみれば、著者の研究者としての誠実さと心遣いを感じることができる。このような作品は、繰り返し読んで、詳しく吟味する価値がある。その学術の風格は、まさに「文、其人の如し」（文章にその人の性格や特徴が出る）という言葉どおりである。学問には一定の品位が必要であるが、人間としては一定の品格が必要である、と周星教授はよく強調している。彼がトイレの問題に関心を持つのは、彼が我々のこの時代の生活の質と一般の人々の尊厳のある生活を必要としていたからである。日常生活から問題を発見しその考察を行って、一般民衆の日常生活の質を向上させるために学術作品を書くという著者の立場は尊敬に値する。そして、我々が賞賛しなければならないのは、著者は常に様々なありふれた話題を質朴な表現で書くことである。以上のような理由で、本書は多くの読者を獲得していくと考えられる。また本書の影響力は、第 1 版が刊行された後半年足らずで、再版の機会が与えられたことからも見られる。今後、学術界にこのような良書が多く刊行されるように望んでいる。